

Contents
目次

- 特集1:ドキュメンテーションを通じた多様な視点の浸透で、新人も意見を言いやすい組織に
- モデル園コミュニティレポート:行事を「普段の保育を見てもらう機会」に。内容を定める先生方の試行錯誤とは

特集1:ドキュメンテーションを通じた多様な視点の浸透で、新人も意見を言いやすい組織に ～ルクミー みらい保育スクール「往還型ドキュメンテーション活用コース」の学びを実践中！



お話: 飯岡こども園 主幹保育教諭 木村先生
写真は飯岡こども園外観

ルクミーが主催する保育施設向け実践型オンライン研修「ルクミー みらい保育スクール」では、園・施設の課題解決や保育の質向上を目指す先生方を、さまざまな研修プログラムでサポートしています。その中のひとつである「往還型ドキュメンテーション活用」コースに参加されたのが、飯岡こども園の主幹保育教諭木村先生です。研修で学んだことをすべて取り入れるのではなく、園に合った形で導入できないか模索されているという木村先生。新人研修にもドキュメンテーションを活用し、先生方にも変化が出てきたそうです。どのような取り組みによってどう変わったのか、具体的なエピソードをうかがいました。

「ドキュメンテーション研修を職員研修へ」をチャレンジテーマに研修へ参加

A21 飯岡こども園 木村暁朝

○チャレンジテーマ
・ドキュメンテーション研修を職員研修へ

▼研修を受けて、園の掲示物の変化

5月7日(金) ももこやこやこ園

●外遊び①

「ウーイ!有線球で遊ぼうかな?」
木村先生が呼びかけ、子供たちが
おもしろ、楽しそう!

●外遊び②

「ウーイ!有線球で遊ぼうかな?」
木村先生が呼びかけ、子供たちが
おもしろ、楽しそう!

●外遊び③

「ウーイ!有線球で遊ぼうかな?」
木村先生が呼びかけ、子供たちが
おもしろ、楽しそう!

○チャレンジテーマ設定の理由
・ドキュメンテーションを活用することで、保護者に子どもの様子をより伝えられるものとしたり、保育を振り返り、見直す機会となるように詳しい書き方、活用方法を学び、職員育成へ活かしたいと考えたため。

★学んだこと、気づきや変化
・研修を受ける前は、保護者に伝えることをメインとして写真を使って一日の様子を知らせていました。
・しかし、保育を振り返る術として、ドキュメンテーションを活用して、写真を通して子どもを多面的な見方で成長を見守ることが出来ることになり、職員にアプローチしていききました。
・最初は自分で作成したり、負担にならないように写真と文章を当てはめるだけの様式を作成したところ、行事やそれ以外にも職員同士で保育の中の発見を話し合い、発信するようになりました。
・また、園だよりには、子どもの姿から見る保育者の考察としてまとめを記入し、保護者に配るようにしたことで、普段から職員が子どもの様子を見る、撮る内容が変化してきたように感じています。
・園の新人研修として写真を活用し、様々な子どもの見方があることが分かるようになり、研修の内容も充実しています。

◆今後の目標・継続していきたいこと
・職員一人一人が写真を活用しながら保育を振り返ることが有効であるという気付きをより強めるようにし、自分たちの業務の中で使いやすいものに変化させていきたいと感じています。
・まだまだ業務が増えると感じている職員がいるが、要録や月案を立てる時にも、写真を使い日々振り返りを大切にするからこそ、効率的に仕事をこなせるということが意識できるようにしていきたいと考えています。

研修に参加する前から、当園では写真を使って1日の保育の様子を保護者に知らせる取り組みを行ってきました。しかし、「活動を知らせるため」として全体の様子をまとめた写真が多く、あくまで保護者に見て頂くための写真という印象。そこから次の活動につなげることもありませんでした。

しかし研修を受け、現場の保育士がドキュメンテーションを作るようになると、活動の意味や経過、子どもの興味の移り変わりを知らうとする写真が増えてきたのです。撮影するなかで、保育者が子どもの興味関心を問いかける場面も増えたように感じます。写真を使った振り返りを日常的に行うようになり、その一部を園だよりも掲載するようになり、写真を通して子どもを多面的に捉え、成長を見守ることにつながるとわかったため、園全体でドキュメンテーションの導入を進めました。

自園に導入しやすいよう「行事」のドキュメンテーション作りからスタート

ドキュメンテーションを導入するにあたり、まずは保育者が実践しやすい行事の一部で作成することにしました。子どもの成長がわかるドキュメンテーションを作成し、保護者にも伝えられるよう園内に掲示。すると保護者の方も目を留め、「こんなことがあったんですか」と担任の先生に話しかけてくださる機会が増えました。

写真を見て話ができる経験をしたことで、保護者も保育者も「このような活用方法があるのだな」と理解できました。また、自分たちが実践している保育をしっかりと伝えられることが、職員の自信にもつながっているように感じます。

ドキュメンテーションがあるからこそ、次の活動で準備すべきものが見えてきたり、活動の提案ができるようになったりと、保育計画にまでいい影響が広がってきています。

加えて、保護者も園での様子や子どもの表情を写真で見ることができるように。

「園でこのような活動をしたから、家でこのような質問をしてきたのか」など、子どもの理解がより深まっているようです。

新人研修にドキュメンテーションを導入。語り合う言葉に変化が

探索遊び①

6月、クラスでは園庭活動が盛んに行われた。A君がヤスデを発見。友達に見せに行くと子供達の興味が一気に集中した。

ある日、部屋にある小さな図鑑の中にA君の見つけたヤスデの写真を友達が発見。「これいたよね」と保育者に伝えてくれた。A君にも伝えると「A、見つけたよ」と友達同士で一つの図鑑を囲み、大盛り上がりでした。



※写真は、新人研修で、新人の保育士が作成したドキュメンテーション一例

そこで今年度は、法人が運営する4つの園が集合して行う新人研修でドキュメンテーションを導入することに。

新人6名の他に、研修に参加させたい職員2名を加えた計8名で実施しました。

研修は、写真に写っている子どもの様子や心情について、自分なりに想像して話してもらおうというものです。

新人の場合、普段はどうしてもベテランの保育士に気を遣って自分の考えを伝えきれなかったり、言葉が固くなったりしてしまいます。しかし新人同士であれば、「このような読み取り方もあるのだな」と素直に受け取りやすくなると考えたのです。研修では、肯定し合う空気づくりを意識しました。特に気をつけたのは、以下のポイントです。

- ・聞き合うこと
- ・意見に優劣をつけないこと
- ・誰の話も正解と考えること

そうすることで、さまざまな保育の方法を知って引き出しが増えると考えたのです。

この意識のもと、「自分だったらどう考えるのか」「自分の保育なら何を試すか」といったことをグループで話し合っ

て発表してもらいます。はじめは硬くなっていた職員も、非常に楽しそうに話し合う姿が見られるように。

発表の際も、表情が強ばることなく自分たちの意見をしっかりと話せていました。

ドキュメンテーションを使った話し合いを繰り返すなかで、子どもの声を拾って伝えるなど、次第に言葉が直感的かつ柔らかなものに変化。

ただ様子を伝えるだけにとどまらず、そのあと子どもがどう考えたのかまで言及できるようになったのです。研修を通して、子どもの姿がより伝わるよう、ストレートに表現できるようになりました。

この取り組みを浸透させていくにはまだ時間がかかるかもしれませんが、「さまざまな見方があっていい」という考え方が園内に波及していくことを期待しています。

新人の保育士も、訊ねられたときにはしっかりと自分の意見を伝えてくれるようになりました。



※写真は新人研修の様子一例

写真1枚を持ち寄り、エピソードを語ることから実践

ドキュメンテーションを導入していくうえでは、難しさを感じることもあります。

それは、忙しい保育者に対していかに負担をかけずにドキュメンテーションの質を上げるかという点です。

保育者は子どもから目が離せないうえ、やるべき業務も多く、時間が限られています。研修で学んだことをすべて取り入れようとすると負担が大きくなってしまいます。

そのため、まずは自分の園で取り入れられる部分はどこなのか考えるようにしました。

たとえば新人研修で使う題材も、保育者がドキュメンテーションを作って持ち寄るのではなく、写真1枚を使った読み取りから始めています。

保育者自身が成長を実感できるようなドキュメンテーションの活用方法はないか、さまざまな使い方をして模索しているところです。

目的はドキュメンテーションを作成することではなく、自分のためにうまく活用すること。

それを忘れないようにしなければなりません。

ドキュメンテーションは振り返りの道具でもあり、保護者に発信する道具でもあります。

しかし、それだけに留まらない使い方を見つけたい。

そのために、当園はこれからもさまざまな研修に参加して情報と視野の幅を広げ、できるところから取り入れながら、園をバージョンアップしていきたいと考えています。

■モデル園コミュニティレポート:「行事を「普段の保育を見てもらう機会」に。内容を定める先生方の試行錯誤とは

多くの園・施設が4月に作成している、来年度の年間保育計画。具体的にどのような考え方で行事を決めているのでしょうか。今回、モデル園*の先生方に集まっていただき、行事内容の決め方についてお話をうかがいました。2021年12月取材時点)

*:「スマート保育園・幼稚園・こども園®」の実現に向けて、園における課題の見える化を行い、ルクミーのサービスを活用して、(主に業務効率化のアプローチから)課題解決に取り組まれている園。



◆株式会社 StepUp 統括管理者 村本先生

「どうやったら主体的に行事ができるか」を考えています。

行事とは本来、頑張る場所ではなく、日々の保育との連続性の中にあるものです。

そのため、子どもたちの普段の姿を保護者に見てもらえるような行事へと内容を変えています。

たとえば言ノ葉保育園の生活発表会では以前、劇を披露していたんです。

保育士は「劇のためにたくさんの衣装を作り、準備を頑張らなければならない」という思いを抱いていました。

その結果、普段の保育での子どもの姿を保護者に伝えたいと思っていたにもかかわらず、生活発表会に対する保護者の感想は「衣装が可愛かった」など、本来伝えたい部分から外れてしまっていました。

子どもたちも、振り付けを覚えさせなければならず、見ていて楽しそうではありません。私たちはそこにジレンマを感じていました。そこで、子どもたちの好きなことをさせようと考えたのです。子どもたちの好きなものを担任に聞いたところ、「製作」とのこと。そうして今年的生活発表会のテーマは「製作」になりました。

2歳は、はさみとのりを使った製作。

1～2歳は、「作って遊ぼう」という活動を舞台で行い、保護者に見ていただく予定です。

舞台上で固まって何もできなかった場合を考え、製作キットを保護者に持ち帰っていただく準備もしています。



※↑1-2歳児クラスの制作活動の風景

※↓3歳児以上のクラスの影遊びの様子



保護者への説明についても、今年は内容を大きく変更した為、丁寧に説明を行いました。「今年の発表はこういう風に変える」と園だよりで発表したんです。

今では、行事後の保護者アンケートで衣装の感想を見ることはほとんどなくなりました。

子どもの1年前の成長、今の成長についての感想が増え、保護者に伝えたい部分が伝わったと感じています。

内容をシンプルにしているからこそ、見てもらいたい部分を見てもらえるようになったのではないのでしょうか。



◆株式会社 StepUp 心育保育園 内藤先生

子どもの発達や興味とのすり合わせに、葛藤しながらがんばっています。

当園に在籍する子どもたちは0、1、2歳児です。

行事では、普段の生活の中でできることや好きなことの中から、子どもたちが特に集中する遊びを高月齢と低月齢とに分けて披露する予定です。

保護者の方には、ステージ上での職員とのやりとりや子ども同士の関わりも見ていただければと思っています。

好きな遊びや好きなものを置き、興味がなさそうなものを担任が省く。

年齢が低い分、この見極めが難しいなと感じています。

職員は「年齢に合ったものになっているか」「これで遊ぶためにはどうしたらいいか」と考え、子どもの興味とのすり合わせに葛藤しながら頑張っています。

何が正解なのかは、実際にやってみて子どもたちの反応を見るまでわかりません。

職員の会話から次なる壁が出てくることもあります。

まずは「失敗してもいいからやってみよう」という思いで取り組んでいるところです。



◆社会福祉法人 聖光会 国立クムクム保育園 秋山先生

劇をする場合でも、覚える・やらせるというのではなく、子どもたちが主体的に参加できるよう、子どもたちに決めてもらっています。

当法人はキリスト教の園なので、12月は祝会を開催しています。

0歳児は日頃の生活を見せようと考え、舞台上でいないいないばあや手遊びなど大好きな絵本になぞらえた表現を。

年長さんは、法人の伝統で降誕劇をすることになっています。

台本はある程度決まっているのですが、「覚えさせる」「やらせる」というスタンスではありません。

配役からセリフの表現方法まで、子ども同士で相談して子どもたちで決めていくのです。

担任が誘導せず、とことん話し合わせるよう意識しています。

「日常の主体的な保育を見てもらいたい」という思いを大事にしているので、準備の裏話や経緯をクラスだよりも掲載。

クラスの中での生活の様子も保護者に理解していただき、祝会で披露しました。

とにかくトライ&エラー。

失敗しても、「だめだった」ではなく「次はどうしよう」と考えて進める。

そして「子どもたちの主体性を大事にするのであれば、先生たちもまずやってみよう」と、みんなで認め合いながら頑張っています。